

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370264

研究課題名(和文)デイヴィッド・ヒュームと18世紀英文学

研究課題名(英文)David Hume and 18th-Century British Literature

研究代表者

大河内 昌 (Okochi, Sho)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60194114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は18世紀イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒュームを出発点として、18世紀イギリスの文学と思想の言説のマッピングをこころみた。まずヒュームの思想においては感情や情念を重視する感傷主義的な側面が存在していることを明らかにした。さらに、彼の感情重視の姿勢は、18世紀イギリスにおける市民社会や市場経済を説明し正当化するためのイデオロギーとして機能していることを明らかにした。また、ヒュームの思想を重要な補助線として18世紀イギリスにおける家庭小説ジャンルの形成過程を考察し、さらにヒューム思想を受け継いだエドモンド・バークによる政治的保守思想の構造を美学的なイデオロギーという観点から説明した。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to map political and literary discourses in eighteenth-century Britain in terms of their relation to David Hume's philosophy. Firstly, the focus is laid on his sentimentalist position that regard "feeling" or "passion" as the most important motivating force of human actions as an integral part of his thought. I clarified that his sentimentalism functions as an ideological principle that supported civil society and market economy formed in eighteenth-century Britain. Further, I considered the process of the formation of "domestic novel" that is closely connected with the ideal of civil society. Lastly, I elucidated the formation of political conservatism of Edmund Burke in term of aesthetic ideology.

研究分野：18世紀イギリス思想史・文学、イギリスロマン主義文学

キーワード：デイヴィッド・ヒューム 啓蒙主義 美学 小説の勃興 政治経済学 政治的保守主義

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である大河内は、本研究を開始する以前には、18世紀イギリス文学・思想、ロマン主義文学の研究をおこなってきた。18世紀文学に関してはシャフツベリーにおける美学と倫理学の関係の研究やパークを中心とする崇高美学やピクチャレスクに関する研究を発表していた。フランシス・ハチソンに関する論文も刊行していた。また、2012年にはエドモンド・パークの『崇高と美の起源』(研究社)を翻訳刊行した。感情の哲学という観点からヒュームを分析し、またヒュームと彼以降の18世紀イギリスにおける思想と文学を比較研究しようとする今回の研究は、これまでの18世紀イギリスに文学・思想に関する研究成果を、さらに深化発展させるものである。

2. 研究の目的

18世紀イギリス思想におけるヒュームの重要性を疑う者はいない。彼の思索の射程は哲学的な認識論にとどまらず、経済学、政治学、宗教、歴史記述など、多方面におよんでいる。それを反映して、現在でも彼のテキストは哲学、政治学、経済思想史などの分野で大いに研究され、すさまじい勢いで研究が蓄積されている。しかし、文学研究の分野で彼のテキストが十分に研究されているとはいいがたい。ヒュームが論じられる場合には、古くはバジル・ウィリーに見られるように、文学の背景として言及されるにすぎなかった。しかし、彼の最初の主著である『人間本性論』にあきらかなように、彼の思想においては「虚構」と「想像力」の概念が中心的な役割を果たしている。彼によれば、われわれが現実世界と呼んでいる日常生活の世界も、厳密に考えるならある種の虚構なのであって、その中で人間の行動を規定するのは想像力と情念なのである。理性ではなく想像力こそが人間関係を形成し、社会関係の紐帯となるのだ。虚構と想像力の問題を解明するのは文学研究が引き受けるべき課題である。それだけではない。近年の文学批理論の分野では、表象とイデオロギーの問題がさかんに論じられているが、彼の哲学がそうした現代的な問題に大きな光を投げ掛けてくれるのである。それは彼が18世紀という商業的な近代市民社会の成立期においてすでに、「近代」がはらむ根本的な問題を的確にとらえていたからにはほかならない。彼に先立つホッブズやロックも近代市民社会の問題を考察していたが、彼らは17世紀の宗教的・政治的な混乱や革命の問題に直面しており、平和時にこそ十全に発展する商業的市民社会の基本構造を徹底的に世俗的な視点から考察することができなかった。市民社会の分析において宗教的用語と概念を徹底して排除するヒュームの世俗性は、彼を純粹に近代的な思想家にした。本研究は、まずヒュームの思想を「表象」という観点から分析し、ヒュームが近代世界を

ある種の表象空間として描いていることをあきらかにする。そして、ヒュームの表象空間論は、彼自身のテキストだけでなく、彼以降の文学や思想のテキストを読み解くさいの母型として有効であることを示したい。極論するならば、18世紀半ばから19世紀初頭の政治経済学、美学、文学は、ヒューム問題への回答の試みであったとも言えるのである。だが、それは、ヒュームという思想家の直接的な影響関係をたどるということではない。ヒュームは市民社会が内包するイデオロギー的な問題をきわめて正確かつ明快に把握する鋭敏な知性を持っていたということであり、近代と近代社会の問題に取り組んでいた他の作家たちを分析するさいの有効な座標軸を提供してくれるということである。つまり、ヒュームは近代社会の抽象的な構造モデルを提示しているのであり、そのモデルが近代社会の問題の分析に役立つのである。

3. 研究の方法

本研究はまず、ヒュームの思想の中心に存在する感情を重視する立場があることを確認し、その立場が、彼以降の文学や思想にどのような影響を与えたかを解明するという方法を採用した。したがって、本研究はまず、ヒュームの主要な著作を精読し、彼が感情や情念を市民社会の統制原理として考えていたことを論じ、また、感情を人間の行動原理と考える思想が18世紀のイギリス文学と思想にどう現れているのかという問題を分析した。つまり、ヒュームの感情論をひとつの座標軸として、18世紀の政治的・文学的言説を理解することを試みたのである。18世紀は啓蒙思想のひとつの形態として必然論が流行した。たとえば、デイヴィッド・ハートリー、ジョウセフ・プリーストリー、ウィリアム・ゴドウィンなどである。彼らは、必然論の言語を用いて、人間個人の進歩(ハートリー)、市民社会の進歩(プリーストリー)、人類の完全性の達成(ゴドウィン)などを主張した。こうした必然論が進歩思想と単純に結びつくのは、こうした思想家たちが必然論を物質的な現実にも単純に当てはめたことに由来する。だが、ヒュームによれば必然性は、慣習の力によって起こる感情的な現象にはほかならない。因果的な必然をあくまで心的な世界にとどめたヒュームの理論ははるかに洗練されたものである。今回の研究ではとくにゴドウィンとヒュームを必然論という観点から比較したが、それによって18世紀イギリスのいわゆる進歩的啓蒙思想の問題点と限界が明らかになった。また、ヒュームが描いた情念によって支配される市民社会というヴィジョンの広がりを確認するために、18世紀イギリスで展開した家庭小説問題を考察することも重要である。18世紀イギリス文学の一大特徴は小説ジャンルの形成である。小説の勃興はイアン・ワット以来、中産階級の勃興とそのイデオロギーである個人

主義の流布と関係づけられて論じられてきた。その点に疑問の余地はない。しかし、小説ジャンルの成立の前提として、ある現実的な環境の中に位置づけられ、かつある程度の心理的内実をもった個人が、さまざまな外的な刺激を受けて行動するための舞台となる表象空間の成立が必要である。その表象空間においては、情念、因果関係、外的自然、自己といったものが重要な役割を果たす。18世紀における小説の成立と成熟の過程を解明するために、ヒュームが描いた情念によって支配される市民社会という概念とリアリズム小説の物語世界の関係を指摘することが重要となる。この議論は、いわば小説の構造的起源を探る論考となる。また、18世紀末になると、それまでのコスモポリタンの啓蒙主義にかわって、国家や地域を基盤とするナショナリズムやそれと関連する保守的な政治思想が誕生する。保守主義は理性よりも感情を重んじるという点で、ヒュームの哲学的な政治思想を発展させたものにほかならない。本研究は、エドモンド・バークが『フランス革命の省察』をはじめとするフランス革命論で展開した政治的保守主義の根底に、感情を重視する美学的な契機が存在すること、そしてその感情重視の立場がヒュームの流れを汲むものであることを明らかにし、18世紀イギリス文学・思想におけるヒュームの射程の広さを明らかにした。

4. 研究成果

(1) 本研究は最初にヒューム思想の根幹をなす「必然性」の概念に焦点を当て、ヒュームの特徴を明確にするために、同じように必然性を主張したウィリアム・ゴドウィンとヒュームを比較した。人間世界を自然世界と同じように因果関係の連鎖で説明しようとする合理主義と、その説明に神秘思想や神学が介入することを極力排除しようとする世俗主義を啓蒙思想の特徴と考えるならば、18世紀のイギリスの啓蒙思想を代表する思想家としてのヒュームとゴドウィンには共通点が多い。彼らはともに、政治学を科学にしようという、この時代の啓蒙主義の思想家に特徴的な知的企画に取り組んだ。つまり、彼らはニュートンの自然哲学をモデルとして政治と道徳の世界を因果関係の体系として説明しようとしたのである。だが、彼らの必然論には決定的な違いがある。重要なことは、ヒュームにとって必然性とは内的な印象であり、対象の中にあるもではなく、観察者の心の中にしかない。しかし、ゴドウィンは必然性の概念を現実世界に実在するものであると考え、進化論的な文明観を提示した。必然論が進歩思想と単純に結びつくのは、ゴドウィンが必然論を物質的な現実に単純に当てはめたことに由来する。因果的な必然をあくまで表象世界にとどめたヒュームの理論ははるかに洗練されたものである。ゴドウィンの必然論の思想の特徴はその未来形の主

張であり、現実世界における法則の適用可能性の主張である。たとえば、ゴドウィンは人口増加がもたらす暗い未来というロバート・ウォレスの予測に反論して、精神による身体の完全なコントロールについて論じる。彼によれば、人間はやがて身体の随意的行動のみならず不随意的部分をも支配できるようになってゆくことが予想される。それを徹底的に向上させれば人間は不死となり、睡眠すら必要なくなるかもしれない。ここでの問題となるのは、ゴドウィンの合理主義がそうした夢想にたどりついた理由である。ゴドウィンの出発点は、世界は必然性に支配されているがその必然性は感覚知覚による経験から導き出せないというヒュームと同様の経験論であった。だが、ゴドウィンは知覚の積み重ねとしての経験からしか導き出せない必然性を、物質的現実世界の必然性として語る。ヒュームの哲学は、表象と現実の混同の不可避性とともにその危険性をも注意深く分析するという意味でイデオロギーの分析理論であるが、ゴドウィンの思想は表象と現実を混同するという意味でたんなるイデオロギーである。ゴドウィンの思想はイデオロギーとして短期的に大きな影響力をもち、当時の若者たちを熱狂させ、間もなく忘れ去られた。だが、ヒュームの思想は、イデオロギーとその生成に関する精緻な分析論であるがゆえに、近代的な商業社会が存続するかぎり、その有効性が失われることはない。

(2) 本研究は第二段階において家庭小説と呼ばれるジャンルに目を向けた。ジェイン・オースティンに典型的に見られるような、若い女性の恋愛と結婚を描く家庭小説はギリス小説の中心的ジャンルのひとつである。また、「幸福な家庭」というイメージは、ギリス小説に反復して登場する文学的なモチーフであり、ひとつの「トポス」と呼ぶこともできる。これまでの研究では、家庭小説は貴族階級と中産階級の階級闘争の置き換えられた物語であると見られてきた。だが、なぜ中産階級がジェンダー的に女性として表象されるのかという問題は、さらなる考察に値する。家庭小説における階級とジェンダーのつながりを理解するためには、18世紀ギリス社会のいわゆる「女性化」に関する論争、そしてその論争で焦点となった徳の概念に関する論争を瞥見する必要がある。じっさい、ヒュームが『人間本性論』や『エッセイ集』で分析した徳の概念が家庭小説のイデオロギー性を理解する鍵となるのである。本研究は、家庭小説が表現する女性的徳は、商業社会もしくは市場経済とどのような関係をもつのかという問題を考察した。結論を言うなら、家庭小説が称揚する女性的徳は、経済的な利益獲得を目的とする市場経済の論理に対するアンチテーゼなのである。家庭小説のヒロインたちの行動指針は自らの女性的徳もしくは貞節をまもることであって、彼

女はそれを利益と交換することを徹底して拒否する。だが、没利害的な愛に基づく結婚と、功利的な計算に基づく結婚は、外形的に区別することは困難である。だからこそ、家庭小説は、若い女性の胸中に愛が芽生え、成長する過程を、緻密に、説得力豊かに描かなければならないのである。けっして身分の高くない若い娘の心理を描写するのに、これほどまでに膨大なページ数を費やすというのは、家庭小説が西洋の文学史において最初に始めたことであった。それは近代の市民社会において、若い女性の胸中に宿る不随意的で没利害的な愛というものに大きなイデオロギー的意味が付与されたからである。上で述べたように、若い女性の愛こそ家庭を市場経済から切り離す原動力である。もしそうだとすれば、平凡な娘の胸中に宿る愛こそ、近代の市民社会の存立を可能にする条件であり、それを説得力豊かに描く家庭小説に託されたイデオロギー的使命は非常に重要なものであった。もちろん、家庭小説に先立ってそうした愛という感情が存在していたと考える必要はない。家庭小説という言説が、没利害的で純粋な愛という概念を作り出したのだと考えるほうが自然であろう。しかし、家庭という親密な領域と経済活動の領域が不可分であり、背後でつながっているからこそ、多くの家庭小説に見られるように、社会的・経済的な分野での解決不可能な葛藤が、家庭や家族の問題に翻訳されて、象徴的解決が与えられるという戦略が可能となるのである。この象徴的解決がイデオロギー的な効力をもつのは、市場経済と家庭が、じつは近代的市民社会のもつ二つの側面であるからにほかならない。

(3) 本研究の第三段階は、ヒュームのリベラルな政治思想が 18 世紀後半のイギリスでどのように受け継がれ展開したのかという問題を解明するために、エドモンド・バークの『フランス革命の省察』で提示された政治的保守主義を研究対象に取り上げた。18 世紀イギリスの政治思想の特徴は、想像力と趣味を重視する「女性化」した政治学である。それはこの時代のイギリスでリベラルな政治体制が整い始めていたことを示している。ヒュームやアダム・スミスに代表される 18 世紀イギリスの道徳哲学者たちは、封建主義的な道徳や神学的理想を規範としない、自由な市民によって構成されるリベラルな市民社会の理想を探求した。そうした社会においては、法の強制力よりもむしろ、趣味や礼儀作法といった柔軟な統治の可能性が探求されたのである。ホウィッグの大物政治家であったバークもまた、近代的なリベリズムの理想を追求した政治思想家であった。彼はまた『崇高と美の起源』という重要な美学書を著したことで有名である。しかし、18 世紀末にフランスで起こった革命によって、リベラルな市民社会の理想を再検討する必要性が

生まれた。そして、バークはフランス革命を徹底的に批判することになる。バークのフランス革命論の中には、個人を主体とする啓蒙主義的な政治学から国家や共同体を基盤としたロマン主義的な政治学への転換が見られる。彼の政治学は想像力や趣味を基盤とする点ではヒュームやアダム・スミスと同様であるが、彼はそうした趣味や感受性の基盤を、個人という主体から国家や共同体へと切り替えるような保守主義的な政治学をつくり出したのである。本研究は、『フランス革命の省察』で展開されたバークの言説を修辭的に分析することで、彼の政治思想の深層で機能している美学的な要素を解明した。たとえば、『フランス革命論』におけるバークの議論には、国家を身体や家族に喩える隠喩が頻出するが、そうした隠喩は国家と身体を同一視する機能を果たしている。また、バークは政治問題とそれを解決するための施策の関係をしばしば病気と治療の隠喩で表現するが、それは国家と身体を同一化する修辭法がテキスト全体に浸透しているからである。こうした一連の隠喩をとおして、国家と身体はしっかりと結びつけられ、イギリスの国家や社会制度が国民の自然な感情を引き受ける想像的な身体として類比的に描かれるのである。ここで本研究が確認したことは、バークの美学は身体と結びついていること、その身体は彼の崇高論では個人の生理学的身体であったが、フランス革命論においては想像的で公共的な身体に変わっているということであった。本研究が解明したのは、こうした字義的身体から隠喩的身体への重点の変化は、18 世紀的な啓蒙主義的な趣味論からロマン主義的な想像力論への移行行きという文学史的な変化と関係があるということであった。

5. おもな発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大河内 昌、「エドモンド・バークの『フランス革命の省察』における美学とリベラリズム」、東北大学文学研究科研究年報、査読無、第 65 号、2016、145-167

大河内 昌、「家庭小説の政治学」、東北大学文学研究科研究年報、査読無、第 64 号、2015、85-204

大河内 昌、「ヒューム、ゴドウィンと啓蒙のイデオロギー」、東北大学文学研究科研究年報、査読無、第 63 号、2014、55-57

〔学会発表〕(計 2 件)

大河内 昌、「英文学と英語教育」、日本英文学会東北支部第 70 回大会シンポジウム「英文学と英語・文化・文学教育を考える」(於、宮城学院女子大学) 2015 年 11 月 8 日

大河内 昌、「エドモンド・パークにおける美学的政治学」、日本英文学会第 87 回大会シンポジウム「美学とリベラリズム ロマン主義からモダニズムまで」(於、立正大学品川キャンパス) 2015 年 5 月 23 日

〔図書〕(計 2 件)

大河内 昌、丸善出版、マリアンヌ・クライン・ホロウィッツ編、『スクリプナー思想史大事典』 翻訳編集委員長:野家啓一、全 10 巻、2016、翻訳担当項目:「隠喩」(304-308);「ジャンル」(1488-1596);「文学と政治におけるロマン主義」(3090-3099);「文彩」(3123-3125);「読むこと」(3442-3445)

大河内 昌、みすず書房、ジョージ・スタイナー『むずかしさについて』、2014、加藤雅之・岩田美喜と共訳、担当ページ: 79-136, 193-227

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大河内 昌 (Okochi, Sho)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60194114